恋愛小噺

桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋愛小噺

【Ｎコード】
Ｎ７８５０Ｔ

【作者名】
桜

【あらすじ】
恋愛小噺。
切り取った恋愛の断片。
全ての小説に繋がりはありません。
起承転結もありません。部分、部分が読みたい方へ。

ブラッディ・メアリ

「歳下ってどう思う？」
「別に、どうでもいいんじゃない？」

カウンターの上に置かれたカクテル、グラスの細い首を辿って飲み損ねた水滴がコースターに染み込んで行った。ノーブルな色合いのマニキュアを塗った人差し指でそれを拭って、親指に擦り付ける。

暇潰し、と久し振りに入った懐かしいカウンターバーに昔馴染みは誰もいなくて――当たり前だ、ここに通いつめたのは三年も前のことだった、無言で席に着くとマスター特製のちょっとした前菜が出てくる。

美味しそうな子羊が入ったから、と前置きして出された料理は何年経ってもやっぱり私の口には合って、思わずナイフを置くとフォークだけで食べてしまう。唇にソースがついても、気にしない。親指で拭えばいい、それがこの店にはお似合いだ。

何人か前の彼氏に教えて貰ったこの店は、いつ来ても閑古鳥が鳴いていて本当にいつ来てもまだ店が開いているのか不安になる。

濃いブラウンの看板、聞こえるか聞こえないか分からない程の小さなミュージック。ジャズとかボサノヴァとか明確な曲は似合わず、これだけ小さな音ならばむしろ演歌でもいいような気もした。

耳に垂れるチェーンのイヤリング、捻子を締め過ぎたのか少し耳朶が痛かった。首を小さく傾げて外したイヤリングを二つ、カウンターに置く。間接照明はカウンターの上に三つ、絞り込んだ光を反射して磨いてきたイヤリングが光っている。

「じゃ、ありってことなんだ？」
「さぁ？　どうかしらね」

私の歳には酷く不釣り合いな若い男が横に座っている。まるで知り合いの様に話しかけてくる男は、首を傾げてグラスを持った私の姿を熱っぽく見詰めているようなそんな勘違いを私にさせてしまう。男が人差し指で遊ぶ私のイヤリング、暗い間接照明ではチープには見えないけれど日に当たると途端に安っぽく見えてしまうメッキだ。

男にしては少し伸ばし過ぎの爪を私は気分悪くしながら視線を流し見遣ると、グラスを唇に当てる。グラスに付いたルージュを親指で拭う、と教えてくれたのは誰だっただろうか？　滑って付いた唇の痕をわざと拭いもせずに舌で舐めた。

止まってしまう会話に焦れて、男が口を開く。

懐かしい思い出に浸っているんだから少し黙っててて、そう思っていても口には出さない。呆れた視線だけで気付くだろうか。

「いつもここに来てるの？」

「気分が向いた時だけ」

「じゃ、今日はそんな気分だったんだ」

そんな気分って、どんな深読みをしているのか。考えるのも馬鹿らしいほどの台詞に、つい口端を上げてしまう。

グラスに残る甘い飲み物はもう底が見えている。今日は一杯だけと決めてここに来た筈なのに、この馬鹿らしい駆け引きを楽しんでいる自分。

落せるって思ってる？　そんな簡単に見える？

何も言わないでいてもいつも通りのカクテルが出てくると、昔馴染みのオーダーを覚えてくれていたマスターが愛おしくなる。

初めてここに連れて来られた時は私もまだ可愛らしくて、借りてきた猫みたいだった。慣れないカウンターで膝を擦り合わせて、聞かれた事にただ頷くだけだったのに。

「ね、何歳？　何処に住んでるの？」

「教える様な関係になる気ないの、そっちから教えてよ」
「じゃあ、教えたら教えてくれる？」

シルクジャージのワンピース、胸の隙間から立ち上るのは夜の街にお似合いな官能的な匂い。誰を持ち返る訳じゃないけれど、網を張っているのは勝手でしょ？

ワンピースの裾に隠れているのは太腿真ん中までのストッキング、その上はベルトで止められている。見えない所なのにそれだけで仕草が色っぽくなってしまうのは、剥き出しの太腿が恥ずかしいからだろうか。手首を立てたら流れていく繊細なチェーンのブレスレット。

「どうして知りたいの？」
「え、聞いちゃ駄目？」

聞いた私の声に悪戯心が混ざり合う。しどろもどろになって行く男の声に、思わず咽喉が渇いて新しいグラスにまた唇を付けた。

いつも思うけれど、やっぱりこのカクテルは私の舌には甘過ぎる。可愛らしいピンク色のカクテル。その時は無邪気に唇を付けて、一歩大人に近付いた気分になっていた筈なのに。

そうだ。トマトジュースが苦手だと言った私に勧められたブラッディメアリ、何と混ぜてもやっぱりトマトジュースは苦手だったけれど頼んでみようか。

たまには浮気心や冒険心もいいかもしれない。真面目一辺倒だった枷を外すいいチャンスかもしれない。

「いいよ、駄目なんて言ってない」

教えてよ、知りたいの。そんな事を言いながら、視線を合わせて唇だけ笑って見せる。

「犬、飼ってるんだ」
「犬、好きよ」
「見に来る？　可愛いんだ」

名前、年齢、乗っている車、好きな色。必要最小限、それでも可能な限り教えてくれる無邪気な声に相槌を打った。
垂れてくる水滴を拭うと、親指にルージュの赤が付いた。グロスも塗らずにそのままベタ塗りしたパールの混じらない深紅の口紅、きっと色は薄れてまだらになっているに違いない。

「ね」
「何？」
「口紅、取れてる？」

首を傾げると肩に横髪が滑り落ちる。僅かに開いた唇を凝視する男の視線に「どう？」なんて、小さい声で囁けば眉が少し寄って行くのが見える。
行こうか、戻るか。攻めるか、逃げるか。見え隠れする葛藤に内心冷や冷やしながら、グラスの中身を飲み干した。咽喉に焼き付く苦味と酸味、可愛らしい見かけの割に随分とえげつない度数なのだとマスターが笑った事を思い出した。
久し振りに来ると、これだから駄目だ。高揚した気分のまま、らしくない事までしてしまう。
チェーンバッグの持ち手を掴めば、慌てて体を起こされる。伸ばしてくる手がチェーンを掴む前に「おやすみなさい」と笑った。

「また、会えない？」

縋り付く声を振り払って背を向けるのは、そろそろ潮時と感じた

から。

「会えるといいわね」

社交辞令は大人の武器だ。イエスもノーも曖昧な返答にも似た自分の感情が疎ましい。

「明日は？」

明日は、二年越しの彼と結婚式場の打ち合わせに行かなくてはいけない。

着ていくのは薄いブルーのニットと、ベージュのフレアスカート。ブーケの花のメインはガーベラ、リボンはピンクにしてドレスはまだ決まっていない。

「駄目」

一時の感情に支配されるよりも積み重ねてきた安定した日々を選ぶべきだと訴える自分と、過ぎ去った激情の日々に懐古の情を残す自分が鬩ぎ合う。求めて、追ってくる感情をいつから浴びていないのか。思い出せない程なのが、私の足を止めてしまう。

もっと引きとめて、振り払って気持ちだけ満足したい。

「明後日は？　近くまで行くよ」

明後日は向こうの両親と会食よ。結納の日付まで時間が無いから、最終打ち合わせをしなくてはいけないの。

縋り付く声に噴き出しそうになる。こんな私に、どんな運命を感じたの？

我関せずと言った風のマスターに数枚の札を出して「飼い犬に宜

しくね」と微笑んだ。
看板の打ち込まれた重い扉を閉める寸前の男の顔、見捨てられた小犬の様だ。閉める間際まで視線を合わせたまま、完全に扉が閉じたのを確認して背を向けた。
夜風が開いた胸に苦しい。

一夜の恋なんて、そんな難しい事。出来ないわ。

不機嫌金魚

いくら夏だって言っても、海辺の夜風はやっぱり寒いものだ。
薄着でこんな所に立っている自分を少し責めながら、サマーニットのロングカーディガンに包まれた腕を両手の平で強く胸に引き寄せる。
薄暗闇の夜空にはまだ打ち上げ花火の残像は見えない。僅かに震える手首を出して時計を見たら、もう少し時間には早いらしい。
こんな時に限って、スカートは風に靡くシフォン素材で。こんな時に限って、腰まである長い髪は高く結い上げてある。耳に長く垂れて風に揺れるラインストーンのピアスが恨めしい。ここがせめて隠れてさえいれば、きっと少しは温かいのに。
横に立つのは、スーツ姿の男。鈍感なのか敏感なのか、全く読めない男。
仕事姿は知っているけれど、私服姿は知らない。それくらいの仲で。それでいて、仕事中は結構話もするけれど携帯電話の番号は知らない。それでしかない仲。
短い前髪を軽く上げて、しっかりとした上半身を背広で隠している。
正直、気が利く男ならその温かそうな背広、横で震えている女の子に貸してくれるなんて素敵なこと考えるだろうけれど。お生憎様、そんな気の利く男である筈はない。
だってこんなに前面に出している好意に全く気付かないのだ。彼はどう考えてもおかしいと思う。

「……寒いね」
震え声の私。
「……本当だね」

震え声のあなた。

正直「それだけ着ていれば、十分温かいだろ！」だなんて、いつもの私なら怒鳴っているに違いない。背広が駄目なら、中に着ているワイシャツでいいから貸してくれないかしら？　ああ、もうせめてネクタイでもいいのに。

白いクロコ型押しの腕時計。指し示す時間は打ち上げ花火の予定時刻まであと十五分。

これほど開始時刻を守る日本の慣習を憎んだ事は無い。海外に行って時刻通りに来ない電車にも、タクシーにも暴言を吐いたあの時の自分が心狭く見えてくる程よ。

十五分位いいじゃない、そろそろ打ち上げ始めて欲しい。だって、もうそろそろ心折れてしまいそう。

海面を辿って、吹き付けてくる少し湿った夜風。流されるシフォンのスカートに色気も何も感じることなんて出来る筈もない。

らしくない勇気振り絞って「腕、組んだら温かいかも」なんて、言ってみたのに。

「そっか、そうだよね」

動く彼の腕に期待の膨らんだ私の落ち込みようと言ったらない。

ああ、自分の腕を組めって言ってる訳じゃないんだってば。

偉そうに、腕を胸の前で組んだ男女が二人。最高に雰囲気ある筈の打ち上げ花火を待って海辺で待ってる。

本当は入っちゃ駄目な仕事関係で使う作業場の扉。無理言って開けて貰ったお陰で見える人影は全く無くて、気付くと空に瞬いている星空を重役みたいに踏ん反り返って見るしかない。

擦り合わせた膝が細かく揺れて、奥歯が寒さで噛み合わない。不貞腐れた顔で横を見たら、暗闇の夜空を見上げる嬉しそうな彼の顔。

ああ、腹が立ってきた。

「そろそろかな」

声の主は、横で震えながら不機嫌になっている私に気付いてさえもいない。

やっぱり無理なのかな、同僚以外には昇進不可能かな。そう思ってしまうと、急に小心者の私は楽しみにしていた筈の花火から途端に興味を無くしてしまう。

勝ち目が無い恋愛なんて、時間の無駄でしょう？　少しでも勝機があれば攻めようって気になるけれど、無駄な駆け引きなんて意味が無いもの。

横で楽しそうにしている彼の良く磨かれた革靴の上にパンプスのヒールを叩き込みたい気分になりながら、カーディガンに包まれた腕を小さく溜息つきながら擦って見せた。

大きく嘶くのは、夜空に咲く大輪の花。こんな泣きだしそうな気持ちで見るなんて、思ってもみなかった。

二人で「綺麗だね」って楽しみたかったのに、ずっとそれだけを楽しみに今週は仕事をしていたのに。

そんな私を振り返った彼は小さく「寒くない？」って、今更私の耳に囁いてくる。

私の耳に唇を寄せたのは、何も下心があった訳じゃないんでしょう？　ただ体に響いてくる大きな打ち上げ音が声の邪魔をして、聞こえないかもしれないって思っただけだから邪推するのは無しにした。

だってもう期待するのは疲れてしまった。

花火が終わったら、もう彼なんて諦めてしまおう。良かった、まだ本当に本気にまでなっていなかったから間に合うもの。携帯電話だって聞いてないし、告白だってまだしてないもの。

良かった、良かった。うん、本当に良かった。

こんな気の利かない男なんて、こちらの方からお断りだわ。きっ

と苦労するにきまってる。
言い聞かせた言葉は私の脳裏に反響する。何度も言い聞かせてしまえば、大丈夫。

「ほら、見て。凄く綺麗だよ」

笑いながら空を指差す彼の声に返事もせず、下唇を噛む。いい大人の癖にこんなことではしゃぐなんて子供っぽいと思う。
空には降りしきる星の波。打ち寄せて、漣を立てて影もなく引いて行く。咲くのは、真っ赤な大輪の彼岸花。
白、赤、緑、青、小さく大きく、流れるように、押し寄せるように。
肩に手を置かないで欲しい。あまり近くに寄らないで。
嬉しそうな顔をしているのは私が理解不能な男、真意も行動も読めないのが口惜しい。

「凄く楽しみにしてたんだ。仕事、かなり急いで終わらせた」

一人温かい恰好して腕なんか組んでる癖に、そんな優しい事言わないで。
不貞腐れたままでもう花火なんて見ずに、足元の小石をつま先で蹴った。そんな私の顔を覗き込んでくる不安げな彼の顔。

「何か、怒ってる？　腹減った？」
「……空いてない」

可愛くない事を言っているって分かっている。あんなに尻尾を振っておいて、いざ面白く無くなると不貞腐れるんだと、自分でもよく分かっていた。
大きな手の平で私の髪の毛をぐしゃりと撫でて「飯、食いに行こ

うか」なんて、分かった様な振りをするあなたが嫌いよ。

「だから、空いて無いって」

「あー……、はいはい。恥ずかしいよね、腹鳴ると」

「だから、違うんだってば！」

そろそろ勘違いもいい加減にして欲しい。妙な勘ぐりだけは一流なんだから。

まだいくつも鳴り響いている花火に即背中を向けて行く彼の背中を、綺麗な花火に後ろ髪引かれながら私は小走りで追いかける。

暗闇に去って行く背広姿の背中は悔しいけれどやっぱり気になって、はいさようならって出来ないのがまた腹が立つんだわ。

「花火はまた、次にしようよ」

面白くなさそうに唇を尖がらせて彼の指を後ろから掴んだ。背広の脇で温められた指は、私の夜風に冷えた指を無意識に包み込む。

「……冷たっ！　もしかして、かなり寒かったんじゃないの？」

返事もしないでそのまま彼の横を通り過ぎた。

名誉挽回の機会、あと一度だけあげるよ。こんな鈍感な男、私位気の利く女じゃなきゃ誰も構ってなんかくれないよ。

だから、もう私でいいでしょ？

上下関係

１－ＷＥＥＫ　ＳＣＨＥＤＵＬＥ

Ｍｏｎ　以下、仕事以外予定なし
Ｔｕｅ　同上
Ｗｅｄ　同上
Ｔｈｕ　同上
Ｆｒｉ　同上
Ｓａｔ　仕事休み
Ｓｕｎ　仕事休み　トイレットペーパーを買う（シャンプーの買い置き？）

手首の上、重ねたパイプ椅子がガチャガチャと鳴った。
薄いブラウスの上からも分かる腕の灼熱感、重さで腕は悲鳴を上げている。それでも意に介せず、足を進めた。勿論、数歩ずつ重過ぎる腕の飾りを床に下ろして休みながらだけれど。

持てるよね？　と、直属の上司である女が言った。持てません、とは言えずに、勿論持てます、と答えた。
持ち上げる事だけは容易いけれど、それを持って歩くなんて以ての外だ。頼むわね、と背中を向ける薄い背中にこのパイプ椅子を投げ付けてやろうか？　出来はしないけれど、思わず考える。
薄暗い物品室、壁に備え付けてあるスチール製の棚には所狭しと段ボール箱が置かれ、コンクリート剥き出しの壁は見ているだけで薄ら寒い。
狭い物品室を辛うじて照らす蛍光灯はチカチカと点滅を繰り返す。そろそろ蛍光灯の交換時期だ、このまま暗闇に籠っていても埒が明かないだろう。

曇りガラスのドアの古めかしいノブを痛む手首を回しながら開けたのはつい数分前の事、それからまだ数メートルしか歩いていないのに、見かけよりもか弱い自分の腕はギブアップを訴えてくる。

ちょっと待て、だってまだちょっとしか歩いて無いじゃん。

引き摺って持って行っちゃ駄目かな。いや無理か、廊下に傷がついちゃうし。

この際だから、八脚全部横抱きってのはどうかな？　無理無理、自分の底力過信し過ぎだ。

やっぱ無理でしたって、半分物品室に戻して来ようかな。でも、その場合やっぱりこれ持って今来た所戻らなきゃいけないんだよね。

「うわ、壁にぶつかった」

「お前の目の前の何処に壁があるんだ？」

独り言ちた私の耳に呆れ声。

その声は冷ややかな声の後「お前にしか見えない壁か」と繋いでくる。

振り返った私の目の前にはアクアノートを振り撒く香水の匂いと、濃いグレーのスーツ姿。出先から戻ったのか。ビジネスバッグを片手に、広くは無い廊下をふさぐ私の背中側に立っている。

渋い顔、呆れ顔、怒った顔。

見かける彼はいつもそんな顔だ。

今日は薄いピンクのワイシャツに控えめな配色が落ち着いて見えるストライプのネクタイ、短い髪を手櫛でかき上げた無造作ヘアー。んと、今日は強風に煽られたままかもしれないけれど。

「あ、先輩！　お疲れ様です！」

私の言葉に、彼はまた渋い顔。決まっていつもそうだから私は全く気にしない。

「だから、俺はお前の先輩になった覚えはない」

戻って来る台詞もいつも一緒だ。だから、分かっていながら私はついふざけた返答を探す。

「今日もいつもと同じ、車の芳香剤の匂いですね」

速攻で戻って来る呆れ顔と沈黙に満足する。

ああ、先輩。今日もその呆れ顔が眩しいです。

彼は一度私の顔を見て、手首に掛かった八脚のパイプ椅子に視線を流した。

呆れ顔の後、渋い顔。いつも通りに、三種類の表情を巡って目まぐるしく彼の表情は変化する。

「で、そのゴツいプレスリーをお前は何処に運ぶつもりなんだ」

「下の階ですよ、なんか会議に使うそうなんで」

「へぇ」

彼が眉を上げるのには、一体何の意味を持つのだろう。

彼は「お疲れさん」と呟いて私の頭上に手の平を置くと、そのまま擦れ違って行く。それを気にもせず「はい、頑張りまっす！」と私は大きく頭を下げた。

下げた頭に引き摺られて、ガチャガチャと忙しない音を掻き鳴らすゴツイプレスリー。

しかしその例えは少しオヤジ臭いと思うんですが、先輩。
離れていく肩幅の広い背広姿を、含み笑いをしながら見送った。

私は、高校から短大を経て今の会社に就職。
高校三年間はずっとバスケ部で、筋肉と協調性を鍛えた。色気話は全く無し、いわゆるスポーツ馬鹿だ。
バスケ部は結構な強豪校で、練習はかなり厳しくて上下関係ももちろん厳しかった。先輩に廊下で擦れ違うときは先輩が背中を向けていても、頭を下げて大きな挨拶。先輩には、絶対服従。練習後、話を聞く時は直立不動。
勿論その掟は女子バスケットボール部のＯＧに限らず、男子バスケットボール部のＯＢにも幅広く適用していて、この会社に就職した私が先輩に会ったのは新人挨拶の時だった。
地元から出て来て、一人暮らし。短大の友達も高校の友達も近くにいない私は、慣れない雑踏の中一人ぼっち。
慌ただしい毎日の勤務、家事に正直一杯一杯だったんだ。
同じ高校の卒業生と聞いて、つい慣れ慣れしく話しかけた私の前で、彼は「高校時代は男バスだった」とあの少し不機嫌そうな顔で言いのけた。
私よりもずっと歳上の彼とは一緒にバスケをした覚えは無いけれど、私にとって彼は「先輩」
どんなに歳をとろうとも、高校卒業してから結構経っていても、私にとって彼は「先輩」なのだ。
それ以上でも、それ以下でもない。それはずっと変わらない。絶対に。

「おい」

長過ぎる休憩を終えて下の階までの長い道のりを歩き始めた私の前で、自分の部署のドアから片手を出したままで彼が声を掛けてき

た。
声を掛けられたら一度立ち止まって、顔を上げて返事。それは高校卒業しても変わらない身に染み付いたバスケ部の決まり事だ。
「はい、何ですか。先輩」
黙りこくるドア向こうの影。立ち止った私の横を擦れ違う彼と同じ部署の社員に「お疲れ様でっす！」と頭を下げると、また大きな金属音が鳴った。
そんな私の姿を見て微笑みながら「そっちこそ」と返してきた社員が去った空間には、甘い香水の残り香。
開いたままのドア、曇りガラスを通して彼らの声が聞こえてくる。
「おう、お疲れ」「あの件、ちょっと無理そうだね」「らしいな」
「もう少し練ってみるよ」なんて内容、私にはさっぱり分からない。
まずはパイプ椅子だ。この、先輩曰くプレスリーが当面の仕事だ。
未だ話し中のドアを見上げれば、嫌でも視界に入る突き当りの休憩室は今日も日差しが照って暑そうだ。まぁ、休憩室と言うのは名前だけで、今の時間は誰もそこに近寄ろうとはしないけれど。
紙コップの氷は驚くほど早く溶けるし、天井ギリギリまで高く設置してある廊下との仕切りが窓からの日光を照り返すから日焼けでもしそうな程の眩しさだからだ。
何も苦行の為に休憩室には行こうとは思わないだろう、勿論私もそう思う。
「おい」
また聞こえてくる彼の声に「はい、何ですかね」と答える。
パイプ椅子の背もたれが私の腕の有り余った肉を挟んで痛みが走ると、思わず眉を寄せて「痛」と呟いてしまった。無機質なパイプ

を睨みつけて、ブラウスに隠れた腕に思いを馳せる。きっと内出血しているに違いない。
聞こえてくるのは渋い声、渋いのは顔じゃなくて声。
「……壁に立て掛けとけ、後で運んどく」
「いやいやいや、先輩にさせる訳にはいかないです」
「いい。どうせ、あそこに段ボールを取りに行けって今頼まれたからな」
「おおう、なんてナイスタイミング！」
私の返答に、彼はまた黙りこくる。
「あの資料でいいんだな」「ああ、今取りに行くんだ？」なんて会話がまた聞こえて、背広を脱いだ彼がのそりとドア向こうから出てきた。
ワイシャツを肘の直ぐ下まで捲り上げて、手首の腕時計を外してきたらしい。筋肉質な腕が無造作に捲り上げた袖から剥き出しになっている。
パイプ椅子の重さで皺くちゃになった私のブラウスを滑る様に、八脚の椅子は彼の腕に収まった。まるで重さを感じさせない体格の違いに、私はつい微笑んでしまう。
「いや、先輩なら今でもスリーポイント行けそうですね」
「無理だろ、フリースローでも自信ない」
「まぁ、私はこの間ランニングシュートで無様にコケましたけどね」
「威張る事か、それは」
彼はそう、次は声では無く渋い顔で答えると「仕事、戻れ」と言い残して私に背を向けた。
勿論、腕のパイプ椅子は引き摺る事もせずに、彼は軽い足取りで

階段に向かっていく。

「助かります！　お願いします！」

大きな声で彼の背中に声を掛けた私に、彼は一言「うるせぇ」と背中越しに答えた。

まぁ、それもいつもの事だ。私は彼を見送る事はせずに、命令通り仕事に戻る為、自分の部署へと足を返すのだ。

ニンジンの間引き

「好きなんですよ、実は」
そう言うと、当たり前の様に返事が来た。
「知ってますよ、昔から」
宥める様に頭を撫でてくれる。違うんだけどなぁ、それとは全く。
私はいつも黒い麦わら帽子を深めに被って、涙を堪えるのだ。

ニンジンの種を撒く時は浅めに溝を作ってその中に種を落として行くのだと、目の前で長靴が笑う。伸びる軍手は指先までずっと泥塗れだ。
一体何年、同じ軍手を使っているんですか。いい加減指先が破れてしまいますよ、もう。
「あ、軍手が破れていたのかなぁ？　泥塗れになっちゃいました」
ほらやっぱり。長靴が向こうに離れて行った。
畝の中に真っすぐと伸びる浅い溝、私の手の中にはニンジンの種。沢山、食べたくて今回の用意した種は二袋。
きっと新鮮なニンジンは生で食べても凄く美味しいですよ。私は筑前煮入ったニンジンが一番好きですけれどね。
「僕は、きんぴらごぼうに入ったニンジンが一番好きです」
そっか、覚えておこう。次に来る時にはお弁当に入れておきます。春巻きの皮に包んだきんぴらならお弁当に入れてもきっと食べ易いでしょ。冷えても美味しいように味は濃い目にしときます。
お料理は結構自信があるんです。勉強したんですよ。
「わぁ、きっといいお嫁さんになれますね」
そうですよね、だからいつでもいいんですよ。

私は長靴の先を見詰めながら、溝にニンジンの種を落として行く。一つ一つ小さなニンジンの種は出来るだけ間を開けて入れて行くん

でしょ？
去年は考えずに、種を撒いたから部分的にジャングルになったニンジンが悲しかった。
折角ここまで大きくなったのに、抜いてしまうなんて忍びないじゃないですか。もう、本当に寂しかったんです。
「だから、言ったじゃないですか。君は昔から何事も大雑把過ぎるんです」
だから、それはずっと昔の事だって言ったじゃないですか。
もう小さな頃の私じゃないんですよ？　こんなに大きくなったんです。手だってほらこんなに大きくて、傍でしゃがんでももうミミズを探したりはしないんですよ。
ミミズを見つけたからって、シャベルで半分に切ったりもしないんですよ。
「そう言えば、そんな事をしていましたね。いや、子供は残酷だ」
その言葉は、そのままお返しします。
トンボの内部構造を教えてあげると、子供だった私の前で両羽を持って縦割りして見せた人は誰ですか？　大人だってそんなものです。あれは私のトラウマなんですよ。
「あ、あはは。すいません」
あ、そのサツマイモはもう少し離して植えて下さいね。秋には天ぷらを食べたいから、沢山芋が出来て欲しいんです。

長靴が剣先スコップの上に乗って、大きな穴を二つ掘った。小さな畑に用意したサツマイモの苗は全部で二株。
甘く美味しいっていう宣伝文句に負けて買ってきました、私が。
「だから、お金は後であげますって」
いらないですよ。だから、芋の収穫祭は絶対に呼んで下さいね。この芋のお料理権は私の物だから、誰にも触らせないで下さいね。
長靴は、開いた二つの穴を跨いでサツマイモの苗を入れて行く。ちょっと深く掘り過ぎじゃないですか？　まだ苗は小さいのに。大

は小を兼ねるって時と場合に寄るんですよ、分かってます？

言いたい事は沢山あったけれど、私は並んだニンジンの種の上に土を被せる事に集中することにした。長く伸びるニンジンの渓谷。

優しく、ほんの少しだけ土を掛けるんでしたよね。確か大きくなぁれ、大きくなぁれ、って言うんですよね。

「おや、僕が言った事を覚えていましたか」

覚えてますよ、全部。何もかも忘れずに全て覚えているんです。忘れようとしても忘れる事なんて出来ないんですよ。私の記憶力を甘く見ないで下さいね。

「勉強には、発揮できないのになぁ」

その件に関しては完全黙秘権を貫きます。いいですか、聞いても今回のレポートの内容は話しませんからね。どうせ、駄目出しをする気なんでしょう？　分かっています。

大きくなぁれ、大きくなぁれ。土のお布団を被って、元気に沢山芽が出ておいで。

手首がピンクの私の軍手は、もう泥塗れだ。

「ナスは好きですか？　僕は好きなんですけど」

好きですよ、ずっと昔から。もういつから好きだったのか、覚えてない位です。

大きくなぁれ、大きくなぁれ。渓谷に土の雨が降りますよ。

「そうですか、来年からナスも作りますか？　焼きナスも好きだし、田楽も好きです」

私も好きですよ、もうなんだっていいくらい好きです。好きな所を上げると切りがない位です。

大きくなぁれ、大きくなぁれ。土の雨で渓谷が埋まっていきますよ。

「本当に、君は昔から食いしん坊さんですよね」

もういい加減子供扱いは止めて、頭を撫でないで下さい。

つばの大きな麦わら帽子を被って来て良かったですよ、今日は本当に日差しが強くて嫌になっちゃう。少し顔を隠しておこうかな、日焼けしちゃ困るので。こう見えても顔には気を使っているんです。
ニンジンの渓谷が埋まって、立派なニンジン畑が出来上がった。満足して頷いた私の前でサツマイモが少し斜めになって鎮座している。
ほら、やっぱり深く掘り過ぎたんですよ。言う事聞かないから、全くもう。

カタツムリが出たら、薬を撒かないと駄目ですね。木酢がいいって聞きましたけど、どうなんですかね。ジョウロに水を入れて来ましょうか。それともホースで一気に霧みたく水を撒いちゃいましょうか。
ちょっと向こうに行ってきますね、私。
「ホースなら、僕が持ってきますよ」
いえいえ、お気になさらず。本当に大したことはないんです。向こうに行くついでにちょっと所用を終わらせてくるだけなんです。ちょっと行ってきますね。
「ああ、トイレですか」
ちょっと、そこは余り突っ込むの禁止じゃないですか？　いくら昔から私の事を知ってるとは言え、もう妙齢の女性ですよ。いい加減わきまえるべきだと思います。
剣先スコップを持って笑いながら、白いタオルで顔を拭ってる。そんな爽やかな顔をしても無駄ですよ。私は軍手を脱いで、小さなスコップの上に掛けると麦わら帽子をかぶり直す。
「帽子は脱いで行った方がいいですよ、トイレなら邪魔だから」
色々問題があって、今私の頭から麦わら帽子は脱着不可能なんです。いいですから、私のトイレと麦わら帽子は放っておいて下さい。
ちょっと行ってきます。
「はい。手は洗ってくるんですよ」

軍手、投げてもいいですか？　白いタオルの向こうで笑い顔。

君のオムツは僕が替えたんだよ。

初めてハイハイを見たのは四カ月だよ、本当に早かったから絶対に体操選手になると思ったんだ。

掴まり立ちは七か月。母親が離れるといつもベビーベッドの柵を噛んでたよ。

初めて僕と外出したのは、確か動物園。

初めて買った玩具は、確か合体物の巨大ロボ。

小さな頃に好きだったのは、リンゴとバナナ。逆に嫌いだったのはカボチャ。離乳食を何度踵落としされて、子供食器を割られたか。

三歳までオムツが取れなくて、一時間ごとに脇を抱えてトイレに走ったよ。

五歳の初めての運動会、全然関係ない所で転んで笑ったなぁ。

七歳に突然、一緒に寝たくないって言われてショックだったんだ。

麦わら帽子の中で鼻をかんで、目元を拭いた。脱着不可能な麦わら帽子は勿論そのままで、少し深めに被って目元を隠す。

ニンジンは植えたから、次は水やりかな。

ホースのカタツムリを両手で持って、引き摺って歩くと後ろにはカタツムリの足跡が出来ている。ずるり、ずるり。伸びて行く足跡。

好きなんですよ、ずっと。会いたかったんです、ずっと。大人になるまでずっと会うのを我慢していたんです、誰より好きだから。

ナスなんかよりも好きですよ。勿論、サツマイモよりも好きですよ。ニンジンはちょっと結構競うかな？　嘘です、ずっと好きですよ。お願い、私を見て。もう子供なんかじゃないでしょう？

遠くで畑にしゃがんでる姿。もう本当に歳とって見えるんで、しっかりして下さいよ。

「僕は君よりも十七も歳上なんですよ、そんなピチピチと一緒にし

ないで下さい」
ピチピチって、流石に突っ込みどころを見失いますね。
ホースを伸ばすと、思い切り私はレバーを掴んだ。ほら、雨が降りますよ。癒しの雨ですよ。そんなナメクジみたくしていたら、雨に溶けてしまいますよ。
「ナメクジは雨が好きですよ。理数系が駄目な人間はこれだから、もう」
基本的な生活知識の無い人が、偉そうに言わないで下さいね。台所に麺つゆと砂糖しかない人、私初めて見ましたよ。
ホースをわざとそっちに向ける。雨が降りますよ、お尻を上げて下さいね。
「だって味付けは基本、麺つゆでしょう？」
わざとホースを近付けると、頭に白いタオルを掛けて逃げて行った。長靴が泥を踏み付けて、飛沫を飛ばしながら離れて行く。ホースを高く上げる。
雨が降りますよ。アリさんは避難して下さい。
ねぇ、もうそろそろ諦めて私にしてくれませんか？　歳の差なんて、私は本当に気にしませんから。
懲りずに、ニンジンの間引きの時はまた呼んで下さいね。勝手に間引きなんてしないで下さいね、今回は沢山植えましたから。
またジャングルになりますよ、凄く間引きをしないと大変な事になりますよ。
「好きなんですよ、ずっと」
「何か言いましたぁ？」
「ううん、何でもないですよ」
雨が降りますよ、皆、避難して下さい。虹が出て来ますよ、皆、上を見てて下さいね。
好きなんですよ、本当に。涙を拭いた。

ガラス　ザイク　？

「攻めるのと、受け身なのは、どっちがお好きですか？」
「どっちでも」
飄々と答える彼の傍で、私も微笑みながら返す。
「偶然ですね、私もどっちでも好きです」
爪を研いでいる私の前で、剥き出しの刃を私の頸動脈に当てて彼が笑う。
「まぁ、泣くよりも泣かせる方が好きかな？」
最悪な男、食えない男。内心で吐き捨て、手に持ったグラスの中身を頭にぶちまけたい衝動に駆られながら私も笑うのだ。
「本当に偶然。私もなんですよ」

ガラス　ザイク　？

聞いて下さいよ、泣きながら後輩が言った。またか、呆れて物も言えない。
最近、聞かされるのはこの手の事ばかりだ。私はアンタ達の公式意見箱じゃないんだけどな。恋愛に感(かま)けているんなら仕事してよ。
大体、あれに手を出そうと思う方が馬鹿なんだって。遠くで見るだけにしときなさい、パンダだと思っておけばいいのよ。
遠くで見てる分には、あの小さく鋭い目は見えないでしょ？　そんなものよ。

だから、書類は出来てるの？　は、出来てない？
大きな溜息を後輩へあからさまにぶつけて、分厚い書類をチェッ

クしに腰掛けた。
ヤバい、仕事し過ぎで目が霞むわ。お局とか偉そうなこと言ってんなら、もう少し年寄りに優しくして欲しいんだけど。
どうして知ってるんですか、って聞かれたくないなら誰もが近付く給湯室で話すな。どんだけ毎日トイレに行くのよ、そんだけ化粧直ししたら口紅も一日で無くなるっつーの。

はい、一枚目から誤字発見。
引き出しを開けると一番前に入っているピンクの蛍光ペンで、次々とチェックを入れて行く。
はい、二枚目は突破。
三枚目は、ちょっとグラフ違うじゃないのさ。アンタ、本当に仕事する気あるの？
平行線を辿るグラフにシンプルな付箋を貼った。シャープペンで差し替え注意の文字を書き込む。

失恋で仕事が出来なかったんです、後輩は涙目で訴えてくる。
でもね、この前は金魚だか鯉だかが死んで仕事が出来ないって言ってたでしょ。でも二日後には復活できたから大丈夫よ、アンタは強い。
金魚じゃなくてブルーディスカス？　どっちも魚、細かい事は気にしない。

五枚目。
だからさ、何回言ったらこの部分のグラフを縦にするなって言ったら理解するの？　留め具で会議の時に見え難いのよ。今回の企画会議で勝つ気あんの？
先輩がチェックしてくれるかと思って、なんてお前はアホか。書類の準備に打ち合わせ、会議の進行に取り纏めもやってたら私の寿命が縮むわ。甘えんな。

六枚目、はい突破。七枚目、って七枚目無いけどドコ行った？

だって先輩、絶対に今回も勝てないですよ。絶対に取られますって。って、だから弱気は禁止。

文句を言ってくる後輩を無視して、彼女の机を漁った。ファイルを開いて、引き出しを開けて、最後にはゴミ箱。見つからないよ、もう。

仕方なく画面を開いて、会議ファイルを開ける。はい、七枚目発見。

直ぐにプリント、忘れない内に。文句言ってないで手を動かす！

だからさ。その失恋なんとやらってのは気の迷いだから。相手は恋も何もしてる気全く無しだから。

まずは夕方の会議に全力投球しなさいよ。はい。腕振り被って、思いっきりストレートを投げる！　だからさ、全力投球ってのはなんていうか、例えの表現で。あーごめん、今の忘れて。ちょっと調子乗り過ぎた。

とにかくプリント。付箋部分は差し替え、チェック部分は誤字だから。四時まで全部終わらせて私に提出する様に。

全てチェックしてから会議に持って行くから、それまで会議室にお茶持ってくるように庶務課に連絡入れといて。あ、ついでに私のお茶は少し冷ましてって言っといて。

苛々しながら愛用のカップを唇に運ぶ。ウエッジウッドのワイルドストロベリー。先輩に似合わず、可愛い柄ですね。なんて、後輩が言ってくる。

後であんたのカップ叩き割っておくから、覚悟しときなさいよ。

仕事用の眼鏡の鼻部分が下って来て、指で持ち上げた。省エネするとどうしても汗をかくから、この部分が滑るんだよね。おばあち

ゃんみたいな仕草、リアルで嫌だな。

コストを半分にすると、簡単にその分単価が下がるってスムーズに行けばいいんだけど、そう言うもんでもないのがキツい。今回の企画は、何度もウチの部署が負けている部署と膝を付き合わせなくてはいけないから、絶対に手を抜く事が許されない。

まず企画を社外に出すには、社内のコンペを抜けてからそれが鉄則だ。それにしてもこの企画はどう見ても向こうに分がある様に見えるんだけど、腹が立つなぁ。

先輩！　白髪、発見しましたよ。書類を始めていると思っていた後輩が、まだ横に立っていた。

アンタの頭に修正液ぶっかけて白髪にしてやろうか。そんな暇は無いんだよ。睨み付けた私の迫力に、後輩は画面の前にそそくさと逃げて行った。

それでいいのよ、まず仕事しろ。四時までに書類上がらなかったら、この間の仏蘭西料理をフルコースで奢って貰うからね。覚悟しなさい。一万二千円のコースだからね。

会議ギリギリまで数字と戦う気だった。昨日は残業、一昨日も残業。一昨日はパック中に眠っていたし、昨日は何と風呂に沈んで起きた。いつか過労死するんじゃないかな、私。

先輩、今回勝てますかね？　と、後輩が言った。

分かんない、やるしかないでしょ。　私は書類から目を話さないで答える。

決戦は今日の夕方。さぁ、兜の緒を閉めて法螺貝でも吹きますか！

何？　失恋した相手の話？　今回のコンペ通ったら話し付けてやるから、セッティングしとけばいいでしょ、もう。しっかり教育的指導をしといてやるから。

いい加減、大人なんだから自分の尻くらい自分で拭け。人に後始末させるの止めなさいよ。

次こそは無いからね、解ってる？

ガラスの彼女

「別れたよ」
通り過ぎた車のスピードが速過ぎて、横を歩く彼女の長い髪が翻った。
「え？」
俺は聞き間違いかと横を振り返り、十センチ低い目線を覗き込む。
彼女はまるで楽しいことを話しているかのように微笑んでいた。
振り返った俺の方は全く向かず、とにかく前を向いていた。
少し鼻の天辺が赤いのはきっと冷たい冬の風の所為だろう。赤いファーの付いた手袋を口元に当てて、彼女は「今日は特に寒いなぁ」と白い溜息を付いている。
空気が特に済んだ今日の夜空には、イミテーションなのかという程の星が瞬いて、都会のビルの谷間だというのにまるで田舎の空の様だ。
星が降ってくる。そんな詩的な感想でも言ってしまいたくなる。
微笑みを湛えた顔の前で、彼女が赤い手の平を振った。
「もう無理だった。流石に温厚な私も切れちゃったよ」
「温厚って。お前が言うな」
「いやね。こんなに優しい私を掴まえて」
「お前が温厚なら、俺はマザーテレサだろ」
彼女は「性別違うし、意味分からないし」と噴き出した。
カシミア製の俺のビジネスコートは濃いグレー。手袋も装備な俺の完全防寒体制と、彼女の薄いダッフルコートでは温かさが全く違うだろう。
でもつい十分前「何処かの店に入ろうか？」と俺が提案しても彼女は首を縦に振らなかった。あくまで歩いて帰るのだという、この寒空の中で。
三年付き合っていた馬鹿男と昨日、別れたらしい。

浮気、金に細かい、嫉妬深い。そんな最悪の男だった。ついでに言えば、マザコンで父親とは異常なほど折り合いが悪い男だったのだという。

それでも好きなのだと彼女いない歴数年の俺の前で堂々と言い放った彼女は、今、彫像の微笑み。

この寒空の所為で顔も心も冷え切って凍ってしまったかのようだ。決して長くない足だというのに彼女は一歩前、俺の前を行く。

「駄目だね。人間、心が広くないとさ」

それはお前がその男を許す為の心の広さなのか？　勿論、傷ついた彼女にそんなことを聞けやしない。

正直、そんな心の広さも優しさも大盤振る舞いすること無いんじゃないか。俺は随分と前からそう思ってはいるけれど、思ったよりも感情の出ない表情の所為で助かっている。

それじゃないと、きっと気付かれてしまうのだろう。

「まぁ、狭いよりは広い方がいいわな」

「でしょうねぇ」

間の抜けた俺達の会話。

まさか横を歩く完全安全パイの俺が長い間、彼女を女としてしか見ていないだなんて、彼女は気付いてもいないのだろう。俺はそれを逆手に取って、長い間相談役として傍らに立ち続けている。

低いヒールのブーツがアスファルトの歩道を叩く度に、俺は革靴の足を少し大きめに前へと出して彼女の横へ並ぶべく画策している。隙あらば、その薄い手袋に包まれた彼女の小さな手を俺のコートへと入れてしまいたい気持ちを抑えながら。

空を見上げた彼女に倣って、俺も上を見上げてみた。

幾つものビルの箱に囲まれたビジネス街には情緒も糞もありはしない。もうひとつ、月が遅ければきっとこの素っ気ない街路樹にもイルミネーションが灯されるのだろう。でもまだ少し早い。

彼女の表情を隠せるほどには薄暗い街並みに彼女は上手いぐらいに隠れて、俺はその暗闇に翻弄されている。

大丈夫か、泣かなくていいのか？　そんな言葉を彼女が求めている訳ではないのだという事だけは、長い付き合いで良く分かっている。

俺が求められている意味を、俺は吐き違えてはいけない。

「ま、色々あるさ」

彼女の表情を見ない振りをして、一歩前を行く彼女を追い越す。

悲しみや寂しさ、不安が入り乱れて無表情になっているだろう彼女は、きっとそんな顔を俺が見ることを望んではいないのだろう。長年、交際していた男とは結婚まで話が行っていたのだと言っていた。

それもこれも全て、酒の席での暴露話だ。

彼女は酒が入ると頓にノロケ話をする事が多かった。俺には一種の拷問に近かったけれど、それもまた耐え切った。

そのお陰で当面、彼女のことはよっぽどのことがない限り理性が飛ぶなんて失態を冒すことはないと誓える。

「そう、かな？」

「ま、これからいい事があるかはお前の行い次第だけど」

「そっか。じゃあ、きっとこれからいいことづくめだね」

「かもな。百円位は拾えるんじゃないか？」

「少な！」

傷心につけ込む厭らしさは持ち合わせたくなかった。ずっと見守ってきて、むしろ俺は兄にでもなった様な気になっているのかも知れなかった。

偉そうなことを言ってふざけていても、きっと彼女は俺と別れたその後に声を殺して泣くのだろう。

今のこの空元気も、きっと、こうしていないと涙が零れそうだからなのだと気付いている。

俺の胸で泣けるようにと抱きしめたら、素直に泣く女なら良かった。

きっと彼女は爆笑しながら「らしくない」とブーツのヒールで俺

の革靴を踏み付け、すぐに背を向けて「でもドラマみたいでカッコいいよ」と慰めようとした俺を褒めてくれるのだろう。
俺はそんな彼女に胸を痛め、彼女は俺の胸で素直に泣けないことでまた俺を恋愛対象から外すのかもしれない。少し深読みし過ぎか。
「いっそ、仕事に生きればいいんじゃないか？」
「ちょっと。一度の失恋で私の恋愛シーズン終了ですか！」
「性懲りも無くまだする気か？」
「これからでしょう」
「……はいはい」
呆れた口調に、冷やかな視線。
立ち止った彼女を置いて、歩き出す。少し彼女の口調に違和感を感じながら、それでもそれすら見ない振りをして。
何度、俺は勘違いをして来たんだろうか。
彼女の口調、彼女の行動。彼女の一挙一動に翻弄されて、いつか俺の方を向いてくれるのだとずっと信じていた。いや、そう思いたかった。この長い数年間、傍にいた意味を俺は無理やり彼女に求めているのかも知れなかった。
洗練された行動と、磨かれたたち振る舞い。
そんなこと、簡単に行動できる筈もなく、ただだらだらと離れるきっかけを失っていた。諦めることはどうしても出来なかった。
ずっと付き合っていた彼氏がいて、それでいて相談できる男を傍に置ける彼女は不実なのだと傍から見ると思えるのかもしれない。実際、自分の彼女にもしそんな関係の男がいたら、俺はきっと許すことが出来ないのだろう。
それを良く知っているのに、俺は彼女の傍に立ち続ける。計算高く何でも相談できる気の置けない男友達として。
そして、その肩書きに首を締められる。
「なんかさ、ちっちゃいよね。宇宙に比べたら」
「そりゃあ。お前、随分と大きいモンと比べたな」
宇宙と比べる程に苦しいってか。

立ち止って振り返ると、また彼女は小走りですぐ横を追い越していく。
長い髪。綺麗に手入れされた髪は男の好みだったのだという。そいつに「切るな」と言われると素直に切らないでいる。俺が「切るな」と言っても、きっと彼女は速攻で美容室に走るだろう。俺とそいつの差がきっとそれだ。
「なんかさ。小さいことでグダグダ言ってるのが本当、馬鹿みたいだよね」
この言葉は誰かに言っている訳ではないのだろう。
すぐに分かったから返事をするのは止めた。
無性に横にいる彼女を引き寄せたくなるのはこんな時だ。傍にいるのに何も出来ずに、俺のいる意味を失った時。
彼女が本当に一人で立っている時に、長年積み立てた何かを壊したくなる。
でもそれは、絶対的な男友達という安全圏を失ってまで必要なことなのか。そう思うともう動けなくなった。
「スッパリ、何もかも終われたらいいのになぁ」
声が震えるのが聞こえて、俺の指が持ち上がる。
ここまで来て、まだグダグダ言っている自分こそスッパリぶちのめしたくなる。長い時間、見守ってきたガラスの彼女を割れてしまうのも覚悟で手を出すか。
俺の中ではまだ結論が出ない。小心者なのだと、友人が言った。男らしくないのだと、自分も思う。
でも、男らしいというのは一体どういう事なのだろう。失敗を恐れずに何もかもぶつかっていくのが男らしいというのであれば、大半の男は男らしくはないのだろう。俺の知っている男の大半は情けないことでグダグダ悩み、小さなことでよく立ち止っている。
聞いてしまおうか。
今、俺はどんな事で彼女に求められているのか。傍にいるだけなら、何も俺じゃなくてもいいんじゃないか。俺じゃなくちゃいけな

い理由は何だ。
残業だった仕事中に入っていた短い彼女からのメール。話したいことがある。そう言われても、愛の告白じゃないことくらいは流石の俺の頭でもよく分かっている。
それでもどうしようもない時に、頼ってくる明確な理由を知りたかった。
二歩前を行く彼女と、少し後ろを歩く俺の姿は道路を走っている車の運転手にはどう見えているのだろうか。緩いカーブでスピードを落とさずに擦り抜けていくのは、美しく磨かれた赤い車。
彼女がその車に顔を上げるのを見逃す事も出来ない。赤くて少しうるさい車、つい先日まで助手席に乗っていた車を彼女は思い出している。
長く白い溜息。今が冬だから、彼女の吐息は白く彩られ表情や口調よりも雄弁だ。
「さ、帰ろっか。もう寒くなってきちゃった」
「だからどこか入ろうって言ったのに」
俺の恨み言に彼女は「本当だよね」と笑う。それでもこれから入ろうとは絶対に言わない。
俺はそれを言ってしまいたいのを堪えて、でも何もかもを飲み込んでしまう訳にもいかずに手の平を彼女の小さな頭に乗せてみる。
思い切り優しく撫でて仕舞いたい衝動を抑えて、無理に乱暴に振舞う。
掻き交ぜる彼女の長い髪。
「うわ！　止めてよ！」
お前は可愛いよ。ずっと見てたんだ、自信持っていいよ。俺が保証するよ。
俺は何もかもを口に出来ず、最後の仕上げに軽くその頭を小突く。
無茶苦茶に強く抱き締めて耳元でそんなことを言えば、きっと行き場のない俺の想いだけは終着するのだろう。でも、そんな俺の重過ぎる想いを受け止めると彼女はきっと戸惑って、知らずに俺を傷

付けた自分の振る舞いを責めるに違いない。
だから今は、ガラスの様なその繊細な彼女の心を黙って見守ることしか出来ない。
奥歯を噛む。彼女が横に並んでも、今は追いつかれたくない。少し速く歩こうか。

恋愛査定

伸びてきた手を振り払うと、驚いた表情をされた。
大きく聞こえるようにわざと溜息をつくと、私は用意していた言葉を唇から漏らす。よりその言葉が残酷に聞こえるように、ずっと練習してきた。
「もう、別れたいんだけど」
想像していた通りに彼は驚いていた。
大きな体。
少し長めの柔らかい髪は、癖があって軽くうねっている。日の光に当たるとそれは透き通った金色に見える程、彼の色素は薄い。
大きな瞳をこれ以上も無い程に見開いて、彼は無表情を装っている私を見ている。
彼のことを何と形容したら一番しっくりくるのだろう。そう考えると、思い浮かぶのは大型犬だった。しかも、ドーベルマンの様な端正で精悍な感じではなく、飼い主を見ると尾がちぎれるのではないかと思う程、人懐っこいゴールデンレトリバー。
私が傍にいる時は、彼は尾でも持っているのではないかという程の従順ぶりを見せる。
戻ってくる彼の反応が鈍すぎて、私の声が聞こえているのか不安になった。
彼の茶色い瞳の中に、睨み付けている私が映っている。余りに自分勝手な顔をしている彼の瞳の中の私は、憎んでいるかと思う程にきつい表情をしている。
「ね、聞こえてた？」
畳み込んだ私の声に、彼は大きく顔を歪める。
見た目が柔らかく温和な空気を纏っている割にしっかりと鍛えられた彼の体はシャツに覆われている。ラフに着こなしたそのシャツは、前に私がプレゼントしたものだ。彼はそれを凄く気に入ってい

て大事に着ている。
泣きそうだ。
彼の顔を見て、そう思う。
その顔を見ると、これ以上もなく傷付けたという後悔が押し寄せてくる。
「……いやだ」
私よりも年上な癖にずっと幼い言動を彼は返してきた。
いつの間にか私の前で正座をして、その揃った膝の上に両拳を並べている。小刻みに震えているその拳。
それを見て、大袈裟な溜息を吐く。
聞き分けのない子供を叱る母親のように、私は前髪をかき上げた。
「いやだって言ったって、もう決めたの。仕方ないじゃない」
「……俺はいやだ」
私だって、そんな簡単に決めた訳じゃなかった。ずっと考えていたことを、やっと決断できただけだ。
何もかもを嫌いだった訳じゃないし、かと言ってずっと傍にいられる程にも許すことも出来なかった。だから、決意したのだ。
顔を上げて、彼は私の顔を覗き込んでくる。
その瞳にいい加減な気持ちは全く見えない。私のことが好きで好きで仕方ない。ただ真摯な気持ちをぶつけてくる彼の姿を見て、私は奥歯を噛んだ。
その真っ直ぐな瞳は私の奥底を読み取って手を離すことを躊躇させてしまうから、眼を背け見ないようにした。
「いつもなら空気読んで、そうだね、とか言うじゃない。今回だけはどうして私の言うことを聞かないのよ」
「……だって、それとこれとは別でしょ」
泣き声の様な掠れ声。
床に投げ出した私の手を握ろうとした彼の指を、私は乱暴に振り払う。
「触らないで」

きつい私の声に、俯いた彼の髪がさらりと下に落ちた。
大きな体なのにね。私はしょぼくれた大型犬の様な彼の頭頂部を見下ろして、震える呼吸を必死で抑える。
彼の部屋のテレビではバラエティが流れている。付き合ったばかりはいつも二人で見ていたテレビ番組、最近はいつも私一人で見ていた。それが当たり前になっていた。
彼の部屋に来たのはいつぶりだっただろう。
もう最近は電話かメールだけの生活が続いていた。メールでも電話でも、決して隠そうとはしないダダ洩れの私への気持ち。それを苦しく思うようになったのはいつからだっただろう。
優しい、優しい。とにかく優しい彼。
私を真綿で包む様に大切にして、慈しんでくれる彼。彼と一緒にいると私は壊れやすいガラス細工にでもなった様な気がしていた。
彼と同じ場所にいると息が詰まる。
「もう、会わないから。今までありがとう」
私は俯いた彼を構わずにその場を立ち上がった。
一歩、足を進ませる前に彼の指が私の長いスカートを掴む。
「……俺は、絶対にいやだ」
無言でスカートを引いた私の顔を見上げて、彼はもう聞こえない程の掠れた声で訴えてくる。
彼の人差し指には大きなシルバーの指輪。シンプルなそれを見てから、その長い指に絡んだ私のスカートを見詰める。絶対に離さない、彼の指はそう言いたいかの様に強く掴んでいた。
「いやだよ」
何か答えようと考えている私が口を開く前に、彼が私の投げ出した手を掴んだ。
大きな手の平で包む私の手。
彼の手はいつも冷たいけれど、今日に限って少し私よりも温かい。覚悟を決めていた筈なのに、その温かさに泣きそうになった。
「どうしたの？　何かあったの？　俺が、何かした？」

彼の手の中で強く拳を握り締める。
優しい声と優しい仕草。彼が立ち上がって私の傍らに立つと、私の頭は彼の肩までしか来ない。苛立つ私に触れるのを少し躊躇して、彼は私の肩へ手を伸ばす。
少し屈んで私の顔を覗き込む。
泣きそうな顔をしているのは彼だ。一方的に私は彼を傷付けているというのに、彼はあくまで私を気遣っている。目線を合わせない私を少し訝っているのかもしれない。
「言いたいことがあったら言って？　俺が出来る事なら何でもするから」
だから、別れるなんて言わないで。彼の言葉はきっとそこまで続くのだろう。
どんなことをしても、もし自分を曲げるのだとしても、彼は構わない。
彼は私にすっかり傾倒している。髪の先から爪の先まで、全て私の何もかもを大事で仕方がないらしい。
馬鹿みたい。私は心の奥底で吐き捨てる。
「何か出来ることがあったら、別れようなんて言わない。もう無理だから言ったの」
抱き締めようと伸びた腕に気付いて、私は彼の胸を押した。
呆気なく彼の体は私から離れていく。本当に呆気なく、それを私は悲しく思う。
唇の震えに連動して、頬が歪んだ。ずっと考えてきたこと全てを言ってしまった。私は置いてけぼりの子供になってしまった彼から一歩、離れる。
彼が顔を上げた。
私が離れたことに、ショックを受けたみたいだった。
「じゃね」
背を向けて二歩目を出す前にその距離を縮められる。
「……ま、待って！」

それでも敢えて気にせずに、私は玄関へと足幅を広くして歩いて行く。後ろから追ってくるのは彼の足音。
ずかずかと歩く私に遠慮して最初は一歩一歩と、本当に振り返りもせず帰ろうとする私に焦りを感じたのか、彼は壁に手を突き、走る。
無駄に広い彼の部屋は、独身にしては大き過ぎる作りだ。長いフローリングの両側には部屋が三つもある。
付き合ったばかりの頃、彼は恥ずかしそうに「部屋は一つしか使ってないんだ」と言っていた。いつか、彼と一緒に住むことがあるならば部屋にだけは苦労しないのだと私は心の奥でそう思っていた。
夕方のリビングには赤い夕焼けの光が射し込んでいる。
窓の無い玄関へと向かう廊下にも赤い光。伸びる影が近付いてくる。
「い、いやだ！　帰らないで！」
手首を掴まれて、引き寄せられる。
真剣な瞳。らしくなく焦るその態度に、私は折れてしまいそうになるのを耐えなくてはいけない。
掴まれていない方の手で、手首を拘束する彼の指を外そうとする。でも、優しい彼にしては珍しく私の手首が赤くなる程に強く握り締めている。勿論、彼の拘束は外れない。
これが最後の攻防だ。
「さっきからそればっかりじゃない」
「……だ、だって」
引き寄せて抱き締めていいものか、彼はそれを悩んでいる様だった。
「私の話は全部終わったの。帰るから、離して」
毅然とした私の声に、彼は俯いてしまう。
小さな声で「いやだ、絶対に離さない」と聞こえて、私は腕を引いた。そのまま、彼の腕が付いてくる。
私たちは仕事が忙しくて、ずっと会えなかった。寂しかったけれ

ど、でもそれが別れの決断に結びついた訳ではない。
だから彼にとって私が別れを切り出したことは青天の霹靂だった筈だ。私たちは表面上は上手くいっていた。
彼は私を愛し、私も彼を愛していた筈だった。でもそれが私には苦しかった。
「何か直すところとかないの？　俺が悪いなら、何でも言ってよ」
最後の方は、もう声にもなっていなかった。掠れ声で「別れたく……ない、んだ」と続き、強張る私の体を抱き締める。優しく、これ以上もなく優しく。
私はその腕の中で泣き出しそうになったのを必死で堪える。
柔らかい彼の髪が私の肩に乗った。吐き出しそうになった罵声と共に唾を飲み込む。
愛おしい。胸一杯に広がる愛おしさと同時に、どす黒い苛立ちが胸を覆う。優しさを受け止める私の心はもう飽和状態だった。
歪む顔。
「止めてよ、もう嫌なの」
私の言葉の後に、背中に回る腕が少し強くなる。
「離して。帰るから」
背中で彼が拳を握り締めたのが分かる。
悔しさに奥歯を噛んでいる。その悔しさを彼は自分に向けている。私の心の変化に気付けなかった自分を責めて悔やんでいる。
出来るだけ優しく、彼の体を押し退けた。少しずつ離れる私の体を惜しむ様に、彼の視線が私を見る。
微笑んで見せる。その顔を見て泣きそうな顔を浮かべる彼で、私は僅かな喜びも感じている。
「ばいばい」
そう告げると、彼の体が動いた。こんなに速くこの人が動けるのだと初めて知った。それくらい速かった。
一度離れた手首を引き寄せて、強く抱き締められる。背骨が軋んで、嫌な音を立てる。

付き合ってから何度も彼は私を抱き締めてくれたけれど、こんな乱暴に抱き締められたことなんて一度も無かった。彼は私をまるで深窓の令嬢とでも思ってるのではないかという程に優しく丁寧に触れていたから。

「……一、ヶ月」

「は？」

良く聞こえなくて聞き返した私の耳元で彼は私を抱き締めたまま、もう一度同じことを言ってくれる。

泣きそうな声で。実際泣いていたのかもしれない。

「一ヶ月、待って。それまでに……覚悟、するから」

馬鹿な提案だと思う。

別れるまでの猶予期間をくれと彼は言っている。

別れる原因を何も聞いていない以上、私が心変わりした可能性だって捨て切れないというのに、あくまで彼は自分の心の準備期間として提示してきた。

私がそれこそ別れを撤回するのだと思ってなのか。それはきっとない。彼は私の頑固さを知っている。一度言い出すと聞かないことも、反対しても意味がないことも。

「それまで今まで通りの関係を続けるってこと？　それこそ私には無駄な時間じゃない」

苦笑した私の首元で悲痛な囁き声。

「ごめん。でも、すぐに別れるなんて、俺には……出来ないよ」

悪女を気取りながら、鼻で笑う私。

そんな私の体を抱きながら、彼は「好きだ」と言った。何か言ってやろうと口を開いた私の非情さなんて見えていないかの様に彼は何度も「好きだ」と繰り返す。

「好きだ。好きだよ。別れるなんて嫌だ。俺は、嫌だよ」

どうしたらいいのか、分からないんだろう。実際、彼が一番望んでいるのは私が別れを撤回する事なのだし。

でも私は何を言っても別れを撤回しようとはしない。

私に愛を告白する度に背中の腕は強くなって、呼吸すらもままならなくなった。
愛の告白は次第に私の名前の連呼となり、声は聞こえない程の掠れ声になる。
名前を呼ばれる度に苦しくなる。それは今も変わらない。優しいこの人が私は好きだっだのだし、彼の優しさを美徳なのだと思ってもいた。
でも、私は我儘だった。誰よりもきっと我儘で自分勝手だ。
「一ヶ月で何が出来るの？　きっと、何も変わらない」
吐き捨てた私の耳元で彼は「変わるよ、だから待って」と言った。
私が頷かない限り、彼はその手を離さないだろう。
「覚悟に一ヶ月も掛かるなんて、本当どうしようもないわね」
意地悪なことを言って私は彼の肩に顔を埋める。
彼の腕が私の頭の重みに安堵したようにまた強くなって、私は泣きそうになった。

恋愛査定　2

あんなに大きな体なのに、彼は少し可愛らしいものがとても似合う。

例えば大きめのパーカー、だぼっと体を包むそれを着て床に座り込む彼は柔らかい髪も相なってまるでぬいぐるみの様だ。

膝の間に広げた写真は彼の作品。犬や猫、それに鳥や子供たち。彼の作品には愛情が溢れている。

どんなに苦しい時も悲しい時も、カメラを持っていさえすれば気が紛れるのだと言っていた。もしかしたら彼はそれをする事で自分自身の感情に蓋をしているのかもしれない。

溢れる自然や淡々と進む毎日への愛情。変化のない毎日の中に光と希望を見つけて彼は切り取っていく。そして写真に閉じ込めていく。

水滴がこんなに綺麗なものなのだということを、私は彼の写真で知った。日の光が線となって落ちてくる真実。人の顔がこんなに美しく見える瞬間。

何よりも私が、私自身がこんなに幸せな顔をして笑うという事実を私は初めて彼の写真で知った。

最初は目的無くふらりと入った。初めての彼の個展は閑散としていた。

ガラス張りのビルの一階は、花に飾られて日の光も入っているのにどこか冷たく感じる。そんな何も変わらないビルの前で私が立ち止ったのは、その奥の明るさにだ。

無機質なビルのロビー向こうには、生命力溢れる一角があった。

それが、彼の個展だ。

通りすがりのひやかしが二人、写真を眺め個展から出て行った。

彼はそれを満面の笑みで見送り、個展の入り口で足を止めている

私を見た。丁寧な仕草で「気軽にどうぞ」と促してくれる。
無表情で、私はその愛想のいい彼を見る。
入る気満々だったというのに、私は何か一言言わないと気が済まない。可愛らしくない性格だと、よく言われた。
先程の客以外誰もいなかったらしい。こんな通りすがりにまで話しかけて来るとは彼は余程暇だったのか。それとも、入るきっかけを失っていた私にまで気を使ってくれているのか。
どちらにしても人がいい。
「あまり知られてないのね」
そう言った私に彼は恥ずかしそうに「初日はそれなりに来るんですよ」と律儀に応えてくれる。
「ふぅん、こんなに綺麗なのにもったいない。もっと宣伝したらいいのに」
一枚、入口に飾られた花と子供の写真を見下ろした私の心からの偽りない言葉に、彼は崩れそうな微笑みを浮かべる。
その時の彼の服装は体に少しぴったりと寄り添った黒いカットソー。私は彼を見ながら、柔らかく温和な空気の彼には似合わないチョイスだと思っていた。
彼にはきっと柔らかい色のシャツが似合う。色素の薄い彼の髪を引きたてて、きっとそれは彼の顔を彩るだろう。より一層、優しげに儚く見せるだろう。
初めて彼の個展に入った時は、退屈していたのもあってしっかり二時間も滞在することになった。
一枚、一枚。写真に愛情を持って説明してくれる彼との話はとても楽しかった。端正な見た目の割に彼は写真を取る為には自分自身に頓着らしい。
「……気付くと食事も睡眠もつい忘れてて」
会話の全てが微笑みと共に向けられる。
私の顔よりも随分と高い彼の視線、彼の顔が間近にあったのなら私はすぐにこの個展を飛び出していただろう。

そもそも余り人と接するのが得意な方ではない。
「人間として最低ランクね、生きるのすらギリギリじゃない」
対する私は笑いもせず、少し見慣れない彼の様な人間に警戒すらしていた。
彼の優しさは正直、恋愛に疎い私には酷だ。
少しある段差の前で、彼は自然に私の前にその大きな手の平を出し、彼の真意が読めなかった私は訝しげな表情を向けた。
自分のしたことに気付いて、彼は頬を赤らめながらさっと手を戻す。柔らかそうな髪に指を入れて、彼は俯くと苦笑している。
聞き取れない程の小さい声、私なんかよりもよっぽど彼は女らしい。
「ここにはおばあちゃんとか高齢の方が結構来てくれるんだけど、結構その段差で躓いたりするんです」
つまりは私もその高齢の人と同じ扱いなのだということだ。
私は呆れ顔で照れ隠しなのか、少し前に行ってしまった彼の背中を見詰めた。
微かに見える耳が赤い。この短時間でも分かる程、過剰に照れやすい彼はきっと今までかなりの人間に無意識ながら気を持たせて、それに驚いてきたのだろう。
こういうのを天然、と呼ぶのかもしれない。彼の持つ過剰な優しさは残酷だ。
でもこの純粋さがこんな美しい写真を生み出すのだと言われれば分かる気がした。彼の見る世界は美しい。美し過ぎた。
一際大きな写真の前で、私は立ち止まる。
写真の鮮やかさ。その瞬間、胸がざわめいた。不安、希望、絶望、混ざり合うのはこの一瞬を切り取った彼の気持ちを感じているのか。
大きな鳥が空を飛んでいる。遠く離れた世界な筈なのに、羽も嘴もはっきりと空の青に浮かびあがっている。
私はそれを見詰めた。
「初めて眼鏡を掛けた時に似ているのね」

立ち止って言った私の言葉に彼は振り返る。
彼の方は見ないまま、私の視線は写真に釘付けになった。
大きな写真の大半は空だ。
なんてことない写真だった筈だ。誰もが大空を飛ぶ鳥の美しさには心を奪われて沢山のアングルで撮っている。青とそれを切り取る鳥の対比、どこを取っても珍しい構図ではない。
それでも、その鳥に心奪われてしまう。

「私、小さい頃から眼が悪かったのね。だから、輪郭のぼやけた世界が本当の世界だと思っていたの」
私は今、眼鏡をかけていない。高校を卒業して、私はコンタクトにして新しい世界を手に入れた。
それでもあの全てが明確に見えたあの一瞬のことを覚えている。
世界は美しい。見慣れた空も雲も、空気でさえも。触れる全ての物がはっきりと見えた時、私は凄くそう思った。
彼が撮ったのだという写真に一歩、近付いて眼を細めた。
眩しいのは総ガラス張りの窓から入ってくる眩しい日の光の所為じゃない。写真から見えるその明るさに、私は眼が眩んだ。
「こんなに綺麗に空を飛ぶ鳥もいるのね。いつも空を見上げているのに、空を飛ぶ鳥なんて見慣れて何とも思ってなかった。眼鏡を初めて掛けた時、確か何もかも一瞬一瞬が美しいのだと、私は気付いた筈なのに」
いつしか、私はその感情を忘れてしまっていた。
仕事の忙しさにかまけて、胸を打つ全てのことを見ない振りしていた。
通勤時には大好きな曲を聞き続け、自然の音に耳を傾けることを忘れてしまう。耳から拒絶すると、通勤時間は格好の睡眠時間か、読書時間になってしまう。
眼の前で通り過ぎる風景は、その時を終えると二度とは戻って来ない。

私は毎日の暮らしでそんな簡単なことを忘れてしまった。
「また少しの間は、鳥が綺麗なのだと思えるのかもしれない」
「……嬉しいです」
私の称賛が真実の言葉なら、それに返してきた彼の言葉もまた真実だった。
写真から眼を離し彼を振り返ると、彼は眩しそうに私を見ている。
変な語りを入れてしまった。その時初めて気付いた。
途端に恥ずかしくなった。
「もう、帰る」
この個展に入ってから、実に二時間も経っている。
その間、客は現れない。もしかしたら個展の奥でたった一人の客を相手にしている主を見て忙しいのだと踵を返してしまったのかもしれない。
胸に抱いた大きな革バッグを腕に下ろし、私は出口へと歩みを進める。
素晴らしい時間をくれた彼に挨拶をしていなかったと気付いて、頭を下げた。
「今日はありがとうございました。頑張って下さい」
写真がもしポストカードにでもなっていたら一枚くらい、今日の記念で欲しかった。でも入口の小さな机には何も載っていない。この出会いを、このままにしておきたくはない。
彼との時間は、今日初めて会ったのだとは思えない程心地よいものだった。
白い紙が束になって置いてある。写真が何もプリントされていない、簡素な紙。名前とこれからの個展のスケジュールが箇条書きで書かれている。
手を伸ばすか否か、悩んでいると小さな笑い声。
「それ、持って行って下さい」
彼の声が背中で聞こえて振り返る。
少し離れた場所で、彼は恥ずかしそうに「次の予定なんです」と

続けた。
「もしよければ、また遊びに来て下さいね」
ガラス張りの窓から射し込んで来るのは赤い夕焼け。無機質だった個展会場は燃え上がった様な色に染め上げられている。
その中で、彼が微笑んでいる。人好きされる優しい笑み。
私はこの人の微笑みが苦手だ。この出会いが特別なのだと、勝手に勘違いしてしまいそうになる。
でもきっと彼はそんな私に気付いてもいないのだろう。また来てほしい、という言葉はこの個展に来た誰にでも言っている。私は客だ。
ふと見下ろしたスケジュールの最後に書かれた彼の経歴は私の想像を絶して、素晴らしいものだった。
沢山の賞を取って、幾つもの個展をこなし、本の表紙を飾ったこともあるらしい。個展に入る前の私の言葉を全て彼の脳裏から消してしまいたい。
むしろこんな場所で個展を開くこと自体、彼には珍しいことなんだろう。
私はどうかえしたらいいのか思い付かず、無言で頷き、その紙をバッグの外ポケットに乱暴に入れる。
背中を向けると、先程のひやかしの客へと向けた様に丁寧に彼は見送ってくれた。
私は、特別なんかじゃない。彼は誰にでもそうなんだ、そう思うと先程までの感動も全て色あせる気がした。
それなのに、また彼の写真を見たくなった。
最初に感情を持ったのは、私の方だ。
それが始まり。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7850t/

恋愛小噺

2011年10月28日09時08分発行